

やぶやま探訪記Database

北海道の沢

[屏風岳\(北大雪/新大函の沢\)](#)
[丸山\(北大雪/小函の沢\)](#)
[知来岳\(増毛山塊/滝の沢\)](#)
[ソエマツ岳\(南日高/ソエマツ南西面\)](#)
[中の岳\(南日高/中の川南東面\)](#)
[太平山\(道南/ヒヤミズ沢川\)](#)
[ニセイチャロマップ岳\(北大雪/ニセイチャロマップ川\)](#)
[神威岳\(南日高/中の川北東面\)](#)
[ニペソツ山\(ヌブントムラウシ川\)](#)
[トヨニ岳\(南日高/トヨニ川右股から南峰\)](#)
[有明山\(北大雪/湧別川\)](#)
[支湧別岳\(北大雪/武利川・十二ノ沢\)](#)
[毛鐘尻山\(パンケオロピリカイ川\)](#)
[屏風岩\(増毛山塊/暑寒別川\)](#)
[1726峰\(北日高/パンケヌーシ川八の沢\)](#)

北海道の積雪期

[斜里岳北壁\(道東\)](#)
[察来山\(樺戸山塊\)](#)
[暑寒別岳中央稜\(増毛山塊\)](#)
[然別山\(然別周辺\)](#)
[ピシカチナイ山\(然別周辺\)](#)
[恵岱岳\(増毛山塊\)](#)
[天幕山\(上川/中越\)](#)
[中ノ沢岳\(増毛山塊\)](#)
[涙の春の道南登山紀行](#)
[徳富岳\(増毛山塊\)](#)
[833m無名峰偵察記\(増毛山塊\)](#)
[833m無名峰登頂記\(増毛山塊\)](#)
[蚊の沢岳\(増毛山塊\)](#)
[春の南暑寒荘周辺\(増毛山塊\)](#)
[西暑寒岳/西尾根\(増毛山塊\)](#)

紀行、雑多な山

[増毛山道行Part1\(別刈-御内\)](#)
[増毛山道行Part2\(御内-武好旧駅通跡\)](#)
[増毛山道行Part4\(浜益御殿-大坂山\)](#)
[増毛山道行Part2補足](#)
[増毛山道行番外編/浜益御殿の牛石を探して1](#)
[増毛山道行番外編/浜益御殿の牛石を探して2](#)
[嵯山](#)
[野塚岳\(南日高/ニオベツ川\)](#)
[ニペソツ山裏道を行く](#)

増毛山道行Part1(別荘-御内)



その昔、別荘と幌を結ぶ27kmの増毛山道と呼ばれる道があった。

20数年前のGWに増毛山塊の縦走をするために暑寒別川から天狗岳と雄冬山のコル付近に上った時に雪面から電柱が出ている光景に驚いた記憶がある。後になって別荘から雄冬山を越えて幌まで道があったことを知り、この電柱は別荘-武好-岩尾まで敷設され岩尾山道と呼ばれ、増毛山道の武好から幌までが使われなくなり廃道状態になったあとも昭和時代に入ってから暫くは使われていた事も知った。機会があるのならこの山道を歩き、写真に収めたいと思いながら20年以上も経ってしまった。

電柱などが残っているのかは解らないが、今年から少しずつトレースして行くことに決め、このpart1は前半部の別荘-御内の記録である。



山道入り口は国道から50mほど入ったところにあるが、道が細く車を止めるスペースがない。

うろろしていたところ、近くの方が出てきたので増毛山道から天狗岳に行きたい旨を話すと、快く空きスペースに駐車をする許可を下さり助かった。200年以上も前の昔の道を歩こうとする見知らぬ登山者のことを気遣ってくれて頭が下がる、別荘の浜の方は優しい。

山道入り口には庚申塚がある。[裏には](#)明治三十二年、十一月十六日世話方とその方の 名前と思われる彫りこみがある。

雪がないためにザックにスキーを固定し藪漕ぎをするが山道が使われなくなった後も作業道、竹の子取りの道として使われているせいか [はっきりと道跡を認める](#)ことができる。

conta151からconta220間は判然としない部分もあるが、道自体は稜線上に忠実につけられたいたので迷う心配は全くない。

途中、林道もからみながらconta309mまでは昔の山道と言うよりは最近、作られた道を歩くことになる。

この山道沿いにスキーツアー(登山用?)のためか暑寒別岳の山の神ルートにあるのと同じ[番号プレート](#)が木に打ち付けてある。

*この庚申塚は画像では小さく見えるが、実際は高さが60cmくらいはある大きく立派な塚である。

conta350m付近で突然のエンジン音。
モーターかなと思ったが、伐採をしているチェーンソーの音であった。

- ・作業の方「どこにいくのさ」
- ・私「天狗岳まで」
- ・作業の方「それなら大別荘から行けばいいしょ」
- ・私「増毛山道を歩きたくて」
- ・作業の方「(543のピークを指差し)あそこを目印に行きなさい。あとは電柱があるから」
- ・私「ありがとうございます」
- ・作業の方「気をつけて行きなさい」

こんな会話を交わし先に進む。別荘の山の人も優しい。

電柱が現存していることを知り、少しほっとする。少し尾根が広くなり視界が少しずつ開け左前方には[暑寒別岳の山の神、西尾根、中ノ沢岳への三本の尾根](#)がきれいに並んで見える。右を見れば泣面山、大別荘山が見える。この付近は大規模に伐採、植林をされている場所が多く、山道跡を見つける事は難しい。543のピークで短いながらも登りらしい登りになり、短い下りの後に山道は林道と交差する。なお、伐採の作業をしていた方々は暑寒別川側の林道からスノーモーターで通っているようである。



73年も前の電柱だ。

林道と出合った地点からは[植生の生え具合でひと目で山道跡](#)とわかる。

少し登ったconta560m付近で[最初の電柱](#)に出合う。倒れるのも時間の問題と思えるほど痛み、傾いている。しかし、70年以上もこの豪雪地帯の風雪に耐えてきたことには驚くばかりである。

今回の山道行の一番の目的であった電柱を見ることができて、感慨ひとしおである。

この電柱のすぐそばに外周が1.5mほどもあるダケカンバの巨木がある。

この老木は山道を作った人々、歩いた人々などを見守ってきたのだろうか。

御内と呼ばれる631mのピークの手前に補強部分のみを残した二本目の電柱がある。近づいてみると[「廣島、昭6」のプレート](#)が打ち付けてある。

631mのピークは御内と名前が付いているくらいだから山道の休憩地点などであったのかもしれないが、今は幼木が生い茂り良い景観は望めない。

再び林道と交差する手前の小ピークの方が幼木が少なく[大別荘山から暑寒別岳まで見回すことができる](#)。

ここには松の木に寄り添うように生えるダケカンバに92番のプレートが打ち付けてある。

それにしても風が強い。543mのピークまででも十分、強い風であったが、この程度の風は暑寒別のそよ風くらいにしか思っていなかったがこの地点まで来ると時々、耐風姿勢が必要なほどである。

[天狗岳もぐっと近づき](#)、昔の旅人は武好まであと一息と思ったのかもしれない。

*上の電柱は「[廣島 昭6](#)」のプレートが打ち付けてあったが、電柱の施設自体は明治29年頃である。

倒れたり補修のために年代の新しい電柱に変わっていったのではないかと思う。この山道内には倒れた物も含めどのくらいの電柱が残っているのかは解らないが、ひょっとしたら明治時代の電柱が残っているのかもしれない。

以上で増毛山道行Part1は終了です。

次回は御内-武好間を予定しています。
2004年4月9日踏破

2004/05/08追記

増毛山道の最初の開削は1796年(寛政8年)で1857年(安政4年)に改修されている。

雄冬から別荘(大別荘)に抜ける道は増毛山道の他に海岸線の断崖を縫ってコタン間を結ぶ道があった。国道231号線の最初の開通(トンネルが崩壊する前)直後に雄冬海岸一帯の岩場の開拓をしたことがある。その時に岩場を避けるように山腹に道があったが、当時は道路の測量用の道程度の認識しかなかったが、コタン間を結ぶ道の跡だったのかもしれない。

[増毛山道行Part2\(御内-武好旧駅通跡\)のページへ](#)

[増毛山道行Part4\(浜益御殿-大坂山\)のページへ](#)

*増毛山道行Part3予定の武好旧駅通-雄冬岳-浜益御殿はお待ち下さい。

[databaseに戻る](#)

増毛山道行Part2(御内-武好旧駅通跡)



Part2は御内から増毛山道の間地点にあたる武好の旧駅通跡までの記録である。
 なお駅通付近は武好(ぶよし)と言う地名が付いていたが、今は国道231号線の雄冬村と岩尾村の間付近にあるトンネルと覆道にその名前が残っているだけである。



雨の予報が出ている中、天気が持ちこたえる事を願って歩き始める。

御内から下りきると大別苧川と暑寒別川を結ぶ林道が山道と交差する。

別苧から灌木に取り付けてある赤地に白抜きの番号が入っている丸い標識はこの林道交差点から先にはなくなる。

ここから明瞭な山道跡が続く。676の小ピークまでは電柱に導かれながら短い登りがある。

676から686の小ピーク間は左側(東側)が灌木のない開けた斜面が続く。

増毛山塊にはいろいろなルートから登っているがその中ではここから見る山塊の展望が一番素晴らしいのではないかと思う。左は本峰から西暑寒、中の沢岳、曇の切れ目から群別岳、浜益岳、御殿、雄冬岳、天狗岳、大別苧山と主要なピークを全て見渡す事ができる。

増毛山塊の全てが見えている訳ではないが、こう見ると山塊の大きさが良く解る。

林道との交差点からは電柱の保存状態が良く、短い間隔で現れる。

なお、山道は左側(東側)の開けた斜面ではなく尾根右側(西側)のダケカンバの灌木帯沿いに通っている。山道沿いにピンクのテープが短い間隔で付けられているのを見ると無積雪期に歩く人間がいるのだろうか。ご苦労な事である。

683の小ピークは雪が融けて地面が出ている場所があり、よく観察すると測量に使う杭が落ちていたので、ひょっとしたら作業道があるのかもしれない。

*左の画像は林道と出合った地点から676の小ピークに向けて電柱に導かれ山道跡を進む。

*タイトル画像は増毛山塊をバックに676mの小ピークへ登っている所である。

686mの小ピークから山道は西へ向きを変え天狗岳を正面に見ながら歩く事になる。

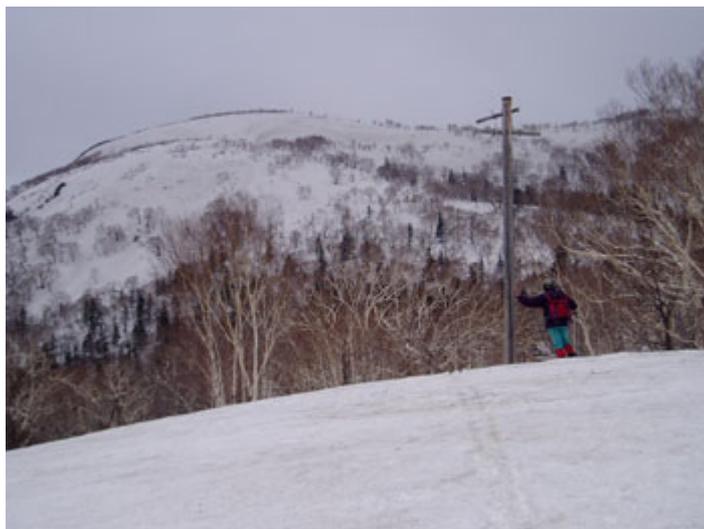
それまで短い間隔で残っていた電柱はcont635mの広いコル付近で消失する。

次に電柱を見るのは留知暑寒別川のcont630m付近に流れ込む支流の左股側の源頭(1/25000の地形図で等高線に600mとふってある少し左上のcont680m付近)になる。おおよそ1kmほど電柱はない。

コル付近からは留知暑寒別川側が歩きやすいので、そちらに進みがちだが地形図では表示きれない小沢が頻りに現れるためにできるだけ登り気味にトラバースした方がよい。

あまり下側を進んでしまうと電柱を見つけるのに苦労する事になる。

なお山道はコルから西に進み天狗岳の東のピークから延びる尾根をcont670m付近まで登り、その地点から等高線沿いにトラバースする様についている。



*右の画像はcont635mの広いコルにある電柱。正面は天狗岳東側ののピーク(この先で電柱が消失する)

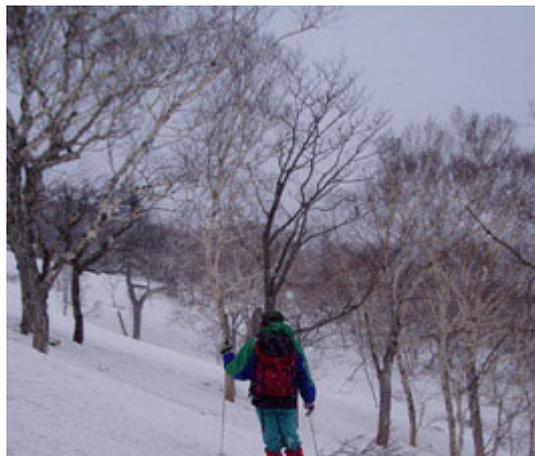
*2003年の11月号の岳人(No.677)に9ページにわたって増毛山道の記録があるが、それを読んでも上の画像の位置付近に昭和24年頃まで残っていた移設された武好駅通があったとの記述が写真入りで紹介されている。

それら写真の中の一つに上の画像と同じか一つ別苅側の電柱付近から撮影されたと思われる駅通があった場所と駅通の写真が掲載されている。

この駅通の画像に関して撮影位置が不明な為、確かな事は言えないが駅通と背景の山の位置関係から写真は東側から天狗岳方向を撮影したとしか考えられないが、駅通と背後の尾根の位置を考えると駅通はもう少し天狗岳よりで天狗岳と683mの小ピークとのコルから天狗岳への尾根を少し登った地点ではないかと思う。

この増毛山道の記事の中には手書きの増毛山道の地図も掲載されている。天狗岳の東のピークから683の小ピーク上に続く尾根上にNo.8468の水準点と駅通が並ぶ様に記載されているが、No.8468の水準点はこの尾根から南に進み天狗岳の東側斜面をトラバースした地点にあり(一度、消失した電柱が再び現れる地点の少し北側)尾根上には存在しない。

実はこの天狗岳東斜面のトラバースの途中に山をバグに撮影された駅通の地形と酷似した地形があり、ひょっとしたらこの辺りにあったのではないかと考えながら歩いていた。岳人には駅通跡からビール瓶や陶器の破片など生活痕があったとの記述があるので間違いないのかもしれないが、岳人に掲載されている画像と地図と現地地形の整合性のなさに少し釈然としないものがあるのも事実である。ただ私は駅通位置に関する文献を持ち合わせていないためにあくまで想像でしかない事を断っておく。



再び現れた電柱から300mほど等高線沿いに進み、その後はcont650付近までトラバース気味に緩やかに下る。

地形図にも記載のある顕著な沢型を越えると山道は尾根上を南へ進む。

どちらかと言うと尾根と言うよりは段丘上になっていて山道は西側を通っている。

昨年(2004年)の台風の影響か至る所で木が倒れている。

電柱沿いに緩い下りに入り下り切ると小さな沢に出会う。

明治40年に設置された一等水準点(8467)の位置とその点の記を見ると、山道がこの小川を渡る直前に一等水準点が設置されており旧駅通は一等水準点の少し北側にあることになっている。

今は一面の雪のために仮に駅逓の痕跡が残っていたとしても見つける事はできないが、現在地と電柱の位置、沢の位置を考慮しおおよその旧駅逓の位置は予想する事はできる。
植生から山道が小川を渡る地点は一目で解る程、顕著でちょうど沢を渡る地点にピンクのテープが結び付けられており恐らく、この地点付近に旧駅逓があったのだろうとの結論に達する。

*左の画像は天狗岳の西側斜面をトラバース中(帰りに撮影のために進む向きが逆になっています)

下が旧駅逓付近と山道が川を渡る地点(武好橋と呼ばれた場所であろうか)の画像である。
赤い服を着た人物の左後方付近に旧駅逓があったと思われる。
なお、山道が小川を渡る地点と付近の数カ所の木にピンクテープが結びつけられていて旧駅逓の位置と何か関係があるのかもしれない。



旧駅逓跡、移設された駅逓跡、水準点をGPSトラック図に表示(注;水準点位置はおおよその位置)



山道の風景(クリックすると別ウインドウで大きな画像が開きます)



2005/5/6記

次回Part3は武好旧駅通跡-浜益御殿を予定しています。

[旧駅通周辺の追加説明を記した「増毛山道行Part2補足」のページへ](#)

[増毛山道行Part1\(別荘-御内\)のページへ](#)

[増毛山道行Part4\(浜益御殿-大坂山\)のページへ](#)

*増毛山道行Part3予定の武好旧駅通-雄冬岳-浜益御殿はお待ち下さい。

[databaseに戻る](#)

増毛山道行Part2補足



この補足のページはPart2の武好旧駅跡前後への夏期、冬期のアプローチなどに関してです。タイトル画像の地形図に振ってある番号と説明(参照画像があるものは別ページで画像が開きます)を参考にしてください。

なお、地形図内の赤線はPart2で歩いたGPSのトラック図、ピンク線は今回歩いた暑寒別川から留知暑寒側を通る林道をアプローチとしたトラック図、6番から始まる雄冬岳への稜線沿いに書かれているグリーンの点線は増毛山道を示しています。

*参照画像は見やすくするためにサイズが大きくなっているために読み込みに時間がかかるかもしれません。

また、番号1の位置は左側の矢印位置に訂正致します。

(1)地形図番号1

昭和24年頃まで立っていた駅跡があった地点

*番号1は上の画像の番号が振ってある位置から左側の矢印の位置に訂正致します。

(2)地形図番号2と3

地形図番号3の地点には地形図に記載のない北に向かう林道「駅跡の沢林道」、地形図に記載のある林道「武好線」と書かれた表示板がある。

「駅跡の沢林道」は地形図番号2の地点までしか巡っていないために予想であるが、恐らく、等高線沿いに番号1の駅跡付近に突き上げる沢までであるのではないかと思います。なお、この林道は植生からみると、既に使われていなく徒歩以外での通行はできないと思われます。

[*参照画像](#)

(3)地形図番号4と5

山道から下山中にぶつかった地形図に記載のない林道で地形図番号4の地点が林道終点です。無積雪期に旧駅跡跡を目指す場合は、この林道から沢を使うか伐採、植林の作業道跡を使う事で最短で到達できると思います。

(4)地形図番号6

旧駅跡跡と武好橋があった地点で、この先は電信柱はない(確認できなかった)。なお、トラックは山道を離れて歩いている。これは橋のかかっていた方向から想像して進んだため、山道は橋(沢)を渡ってすぐに西側の斜面に取り付き稜線に乗るようである。地形図番号6から7に向かった稜線上に岩尾に向かう岩尾山道の分岐点があるのだが、今回は微妙に山道から外れた所を歩いたために見つける事ができなかった。

[*参照画像](#)

(5)地形図番号7

この地点の灌木に「増毛山道 安政年間創建 通行屋跡」と「増毛山道 逆川 梅花藻」の板が打ち付けてある。

後に暑寒荘の管理をしている増毛山岳会の五日市さんに聞いた所、山道が使われていた時代にこの付近に梅花藻の群生地があったとの事で、付近の沢を探してみたが 見つからず、とりあえず標識だけ取り付けたとの事でした。

なお、この地点から地形図に掲載のある林道まで太い林道が通っています。

[*参照画像](#)

(6)山道のトレースについて

増毛山道を忠実にトレースする場合、別荘から出発して地形図番号1の駅跡跡の地点までは稜線上に山道が走っているために山道から大きく外れる事は少ない。

また御内(631mのピーク)の少し別荘側から電信柱があるために、それを目標に歩く事ができる。

しかし、判然としない部分や電信柱のない長いブランクセクションもあるし天狗岳を越えてからはその電信柱も無くなる。

その場合は大正時代に測図された山道が記載された地図を参考にする事になるが、当時の地形図の精度と現在の地形図の精度は当然違う。

現在、私たちが登山に使っている地形図ですら等高線の入り方に間違いがある事も多いくらいだから、大正時代の測図の地形図には精度を求めても意味がないので山道の全体像を把握する程度の使い方しかできない。しかも当時の地形図は1/50000のために詳細を求め現在の1/25000の地形図を使うと悩む事になる。

特に積雪期に歩く場合は多くの山道の痕跡は雪の下のために限られた痕跡を繋いで歩く事になる。

そう言った場合、「植生を観察する事」と「自分が道を作るとしたらどう通すか」を考えると、おおよその山道跡を予想する事は可能である。

三度の増毛山道行(浜益側からも入れると5度)を通して解った事は山道跡をロストした時は植生を観察すると、だいたいの場合は山道跡にはダケカンバもしくは細い白樺がかたまって 生えている事が多いと言う事だ。

これから歩く方は是非、参考にして山道跡をロストした場合はカンバの木を探してみると良い。

[*参考画像](#)

[*おまけの画像](#)

2005/05/14記

[増毛山道行Part1\(別荘-御内\)のページへ](#)

[増毛山道行Part2\(御内-武好旧駅跡跡\)のページへ](#)

[databaseに戻る](#)

増毛山道行Part4(浜益御殿-大坂山)



増毛山道は二つの山越えがある。すなわち雄冬岳(1198m)に登り留知暑寒川と千代志別川に挟まれた広く平坦な尾根を進み浜益御殿(1039m)を経て幌まで下る山越えである。

私たち登山者からすれば積雪期には登りやすい登りのないこの二つの山は容易に登ってしまう山であるが、増毛山道が使われていた時代の貧しい装備などを考えると雄冬岳、浜益御殿の二つの山越えは危険を伴い覚悟を必要とされた道中だったろうと想像できる。

それは武好橋から少し先の岩尾に下る山道(後に新增毛山道と呼ばれる)は昭和に入っても使われる事はあったが、雄冬岳-浜益御殿を越える山道(旧増毛山道)は山道開削後の早い時期に使われなくなった事実からもわかる。

このPart4では二つの山越えの一つ浜益御殿と大坂山間の記録である。

当初はこの区間は別荘側と違い廃道期間が長く、また尾根が広い事と、伐採、植林による破壊などのために山道跡はそれほど残ってはいないだろうと思っていたが、都合6回の調査でかなりの部分が残っている事が解った。

そのために山道跡を解りやすく説明するために地形図上のどの地点に山道跡が残っているかを示している。

なお、浜益御殿の山頂近くには北海道では一番高所にある明治40年に埋標された一等水準点と点名が牛石(べこいし)の三等三角点及び牛石と呼ばれる岩塊がある。これらは三角点マニアの中ではとても有名な石標であるが登山者にはすぐ横を歩いたいながら気にもされない不遇の石標でもある。

Part4では簡単にだけふれているだけなので、詳しくは「[増毛山道番外編/浜益御殿の牛石を探して](#)」の1と2を参考にしてほしい。

幌から浜益御殿のルートはアプローチの容易さと短時間でピークに到達できる気軽さ、ルートの平坦さから昨今の登山ブームと重なって積雪期の人気コースの一つであり、それに伴って年々、デポ旗の残置が増えてきている。

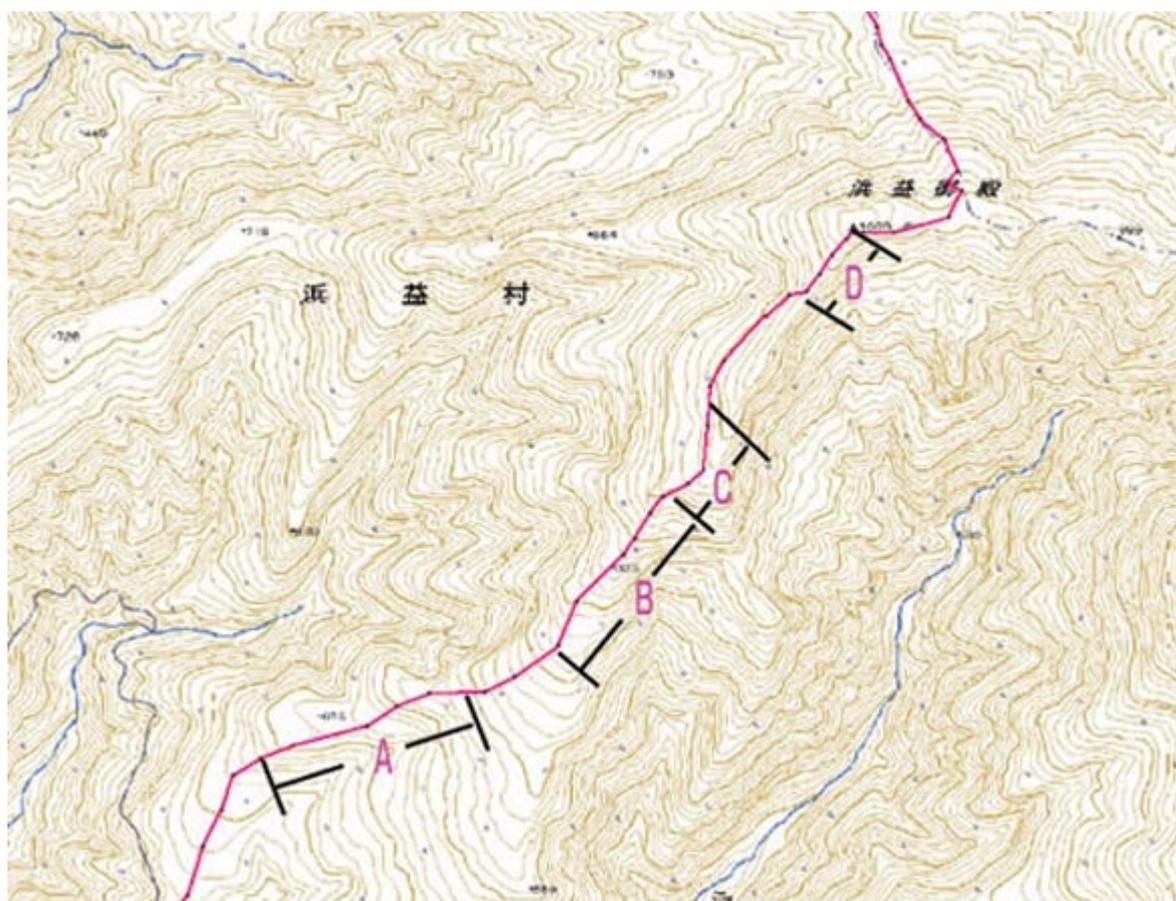
しかし、このルートは悪天候下でホワイトアウトになったとしてもデポ旗は必要ない地形である。

また今年(2005年)に入って頂上名を記した標識を誰かが設置している。

これらは全て登山者が残したゴミである。登った時と同じ状態で下山するのが登山の大原則ではないかとデポ旗や標識を残した人間に強く問いたい。

ゴミを残す事に躊躇いのない登山者はスノーモービルの事をとやかく言う前に、己の行為を考えるべきであ

る。
 ゴミの残置に心当たりがある人間はすぐに回収に行くべきである。これ以上、山をゴミで汚すことを止めていただきたいと切に願う。



地形図を見やすいサイズで掲載してまうと読み込みに時間がかかるために縮小している。その為に細かな標高等が解りづらと思うので各地点の標高をお知らせする。なお、地形図は1/25000を使用しているので実サイズの地形図と併用してもらえると解りやすいと思う。画像の赤い線は多少の誤差がある可能性はあるが、ほぼ増毛山道跡を忠実にトレースしている。

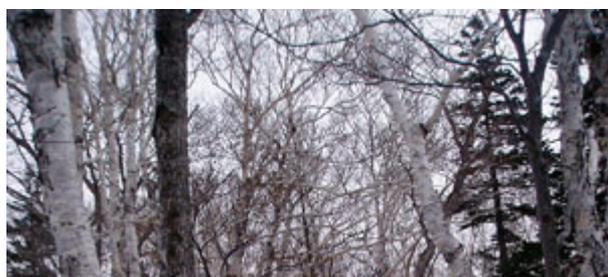
A区間.....conta570mからconta690m

B区間.....conta710mからconta900m

C区間.....conta900mからconta930m

D区間.....conta970mから浜益御殿ピーク

大坂山-A区間(conta570mからconta690m)



大坂山から暫くは伐採、植林の破壊のために山道跡を探す事は難しい。
 山道跡が顕著になるのはconta570mからになる。
 幌から浜益御殿へのルートは春には登山者に人気のあるルートだがconta570m付近から見る事ができる山道跡は、それほど顕著ではなく山道跡を探す事を意識していないと通り過ぎてしまう程度である。

1/25000の地形図で615の標高が振ってある小ピークを左に見る付近は一度、山道の痕跡は無くなるが登りに入ると見事な山道跡を見る事ができる。
 615mの標高点までの山道跡は雪が多いと判別するのが難しいのだが、この登りの途中にある山道跡は雪が多くてもはっきりと確認する事ができる。
 登山をされていて200mほどの長さに渡って直線的に灌木が並んでいる植生を不思議に思った方もいると思うが、まさにこれが山道が通っていた跡になる。
 この山道跡は南側から来る尾根が合流する少し手前で判然としなくなり、再び山道跡が顕著になるのはB地点のconta710m付近からになる。



上の画像はconta570mから615の標高点横手前付近の山道跡
 右の画像は615の標高点を少し登った所から始まる見事な山道跡

B区間(conta710mからconta900m)



数mだけである。

conta710mからcaonta900mのB区間は林道からも良く見える場所である。

B区間の始まりは西側(海側)に直角に折れ曲がっている特徴的なダケカンバがある付近からになる。

左の画像の緑の線が山道跡になる。

直線的に並んだダケカンバからGW頃にはハイマツと笹が露出する尾根の真ん中を通っている。

山道の痕跡は帯の様に一定の幅で灌木が生えていない場所と思いがちだが、実際は道跡にダケカンバ等が入り込んだ結果、直線的に灌木が並んでいる事が多い。

大坂山から浜益御殿までの間であきらかに切り開かれた道跡が残っているのは浜益御殿のピーク手前から浜益岳のコルに降りるほんの

右の画像は上の画像の位置より少し上で撮影した



ものであるが、不自然なまでに直線的にダケカンバが並んでいるのが良くわかる。
 なお、登山の場合は右側の開けた斜面を登って行く。

C区間 (conta900mからconta930m)



B区間を登り切ると山道は尾根西側の平坦な地形を等高線沿いに進む。
 この部分は登りきったconta900m付近に少しだけダケカンバが並んでいる。
 登山の場合、唯一つの登りらしい登りであるB区間を終え、浜益御殿のピークまでのんびりと歩ける所である。
 昔の山道を歩いた人間も同じ様に一息つけたことだろう。

大正八年測量の増毛山道が載っている地形図には尾根西側に道が記載されている。
 conta930mの浜益御殿とのコルの手前の尾根上の小ピークに山道跡の様に切り開かれた様に見える部分があるが、山道が途中から尾根上を進むのか、等高線沿いにコルまで進むのかは解らない。(この切り開かれた部分は下の

D区間の左の画像を参照してほしい)

* 切り開かれた部分に関する追記

地形図すらない江戸時代に開削された増毛山道を通して歩いてみると、この道を作った人間の絶妙なルート取りとセンスの良さに驚くばかりである。そんなセンスを持った人間がこの僅か10数メートルの部分だけ尾根上に道を作るとはどうしても考えられないのは事実で、恐らく、この切り開かれた様に思える部分は単なる植生によるもので、山道は尾根西側をコルに向かって通っているのではないかと思います。

D区間 (conta970mから浜益御殿ピーク)



conta970mのコル付近から浜益御殿までの山道跡は左の画像の緑の線の部分になる。(画像手前に切り開かれたと思える部分があるが、これは山道跡なのか自然にできたものなのかは解らないために、あくまで大正時代に測図された地形図通りに緑の線を入れている)

浜益御殿のピークに出る直前の山道跡のブッシュ帯には北海道では一番高所に現存する明治40年に埋標された一等水準点と牛石と呼ばれる岩塊がある。

一等水準点の「点の記」を読んでもらうと解るが、この牛石と呼ばれる岩塊の上を山道が通っている。

位置などの詳細は「[浜益御殿の牛石を探し](#)

て」を参照して欲しい。

登山者の皆さんはこの有名な一等水準点の1m程横を歩いていながら、気にもと留めていないと思うが、浜益御殿に登りに来た時には是非、見てほしい。

「牛石」と点名がついた三等三角点もこの付近にあるのだが、今年(2005)に入って三度、探しに来ているが未だに見つかっていない。

増毛山道は浜益御殿の最高点は通らずに最高点の少し手前から浜益岳のコルに向かう。このコルに下りきる直前に大坂山-浜益御殿間では唯一、灌木帯を切り開いた跡が残っている。

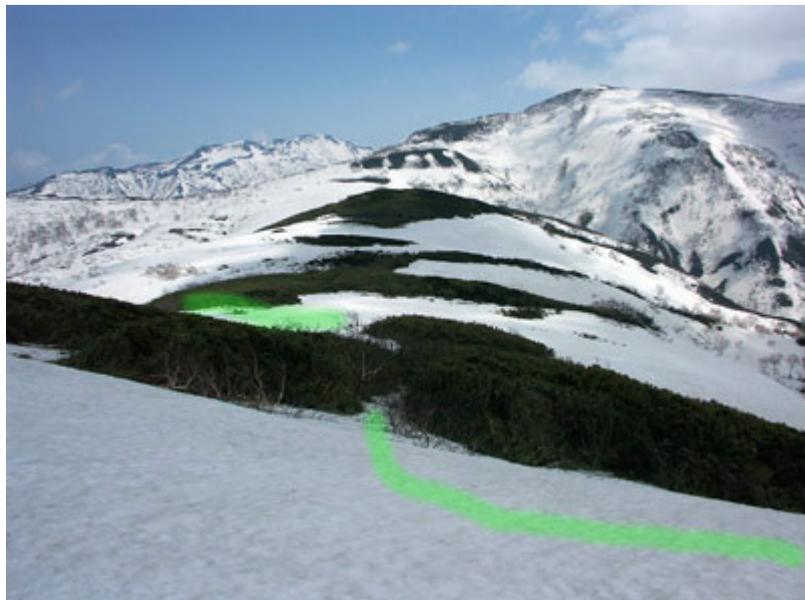
右は浜益御殿の最高点の少し手前から浜益岳とのコル方向を撮影した画像である。

緑の線が山道跡になる。

なお、かつての刈り払われた跡は解りやすくするために線を入れていない。

こう見ると気象条件の厳しい場所では一度、刈り払われてしまうと100年、200年と経っても植生が回復ない事が解る。

2004/5/17から2005/5/28に調査、踏破



[増毛山道行Part1\(別荘-御内\)のページへ](#)

[増毛山道行Part2\(御内-武好旧駅通跡\)のページへ](#)

*増毛山道行Part3予定の武好旧駅通-雄冬岳-浜益御殿はお待ち下さい。

タイトルに使用している地形図/内務省地理調査所発行 1/50000「雄冬」

本文中に使用している地形図/[国土地理院](#)発行 1/25000「雄冬」

[databaseに戻る](#)

増毛山道行番外編/浜益御殿の牛石と水準点を探してPart1



増毛山道は雄冬岳の東側の山腹を通り、浜益御殿を通り幌に下る。
 浜益御殿の頂上直下には牛石と道内では一番標高の高いところに現存する点名が8642の一等水準点が明治40年に設置されている。
 この他にも増毛山道沿いにはいくつかの水準点が設置されているが、今回は三角点マニアの中では有名なこの牛石と一等水準点を探しの山旅である。



5月の中旬ともなると積雪量の多い増毛山塊であっても雪解けが進み、車は林道が533.3m/通称大阪山を越えて西に曲がる部分まで入ることができた。

今日は午後から会議で11時までには車に戻らなければいけないために浜益御殿頂上まではノンストップで飛ばさなければいけない。しかし、600m位までは雪がなさそうである。

歩き始めてすぐに[スノーモービル進入禁止の垂れ幕](#)を越えて林道を進み、最初に出会う沢から尾根を目指す。

前日、団体さんが入山したのであろうか、沢山の足跡がある。

幸いな事に沢から上は雪がありブッシュを漕ぐことなく尾根に乗ることができた。浜益御殿の頂上までは一本道、傾斜もなく飛ばせ飛ばせでどんどん進む。人気

山域なせいかデポ旗が多い。中には設置した人間の[名前まで書いてあるデポ旗](#)もあり末期的である。ここまで来るとゴミを山に残していると言う感覚なんて全くないんだろうと思う。

本当なら写真を撮りながらのんびり歩きたいのだが、西群別、浜益岳、雄冬山をチラッと見ただけで先に進む。仕事人の悲しいところか。

疎林帯は注意して見ると所々、[山道跡が残っている](#)ところがある。

浜益岳を横に見るようになると、まもなく頂上である。きっかり1時間10分で頂上に着き、下山の時間を考えても3時間弱は牛石と水準点探しができそうで安心。

まずは朝食をとりながら休憩。天気はあまり良くはないが[雄冬岳](#)、[屏風岩](#)、[暑寒別岳](#)、[浜益岳](#)が美しい。まだまだ積雪は豊富だ。



特に久しぶりに見る屏風岩は増毛山塊C級ピーク愛好家である私の登山意欲をくすぐる。



牛石、水準点探しを始めるが、漫然とそれらが一番高いところにあるのだと思っていたので浜益御殿頂稜の北側のブッシュ帯を探すがあるのは多数のデポ旗とハイ松を切った跡と用を足したのに使っティシューパーだけであった。

地形図をきちんと見ると三角点マークは頂稜の南側にあり、そちらを探してみると灌木に多数のデポ旗とぼろぼろになり字が読むことができない垂れ幕が巻かれていて、その下には石に囲まれたくぼんだ地面がある。

くぼんだ部分を少し掘ってみるが、木の根と土だけで何もない。落ちていた枝を刺してみると深さ20センチくらいのところで硬いものにぶつかる。

素手で掘ったので木の根が邪魔でなかなか進まないが、やっと花崗岩でできた面取りがされた円柱状の石

が現れる。真ん中は出べその様に盛り上がっている。

[これが一等水準点なのだが](#)、その時はこれが牛石と思っていた。

無知とは恐ろしい。手帳に書き留めた点の記では牛石より北に5.1mのところへ一等水準点があることになっているが、そこは雪の下で探しようもなく、今回は諦めることにする。

6月に入ったら林道を利用し床丹川から遡行すれば短時間でここにこられるので、その時に探すことにして急ぎ下山する。

なお、[一等水準点の位置は次の画像を参考](#)にしてください。

(撮影位置は頂稜の一番北の最高点から南側を写しています)

後記

帰ってきてからインターネットで調べてみると、この円柱状の石が一等水準点であることが解った。

と言うことは牛石はこの水準点から南に5.1mの位置に存在することになる。

それなら雪が融けてブッシュが出ていたので見つけることができたのにと残念である。

6月にもう一度、訪れて牛石を見つけないと。下調べの重要性を痛感。

2004年5月17日踏破

[増毛山道行番外編/浜益御殿の牛石と水準点を探してPart2のページへ続く](#)

[databaseに戻る](#)

増毛山道行番外編/浜益御殿の牛石と水準点を探してPart2



3日前に北海道で一番高所に存在する一等水準点を見つけることができたが、下調べをしていなかったために、見ていたかもしれない牛石(べこ石)の事が気になって再度、訪れてみることにした。



車は前回と同地点までしか入ることができなかったが雪解けが進み前回、アプローチに使った沢は数日でブリッジなどは無くなってしまうだろうと思えるほど雪が無くなっている。

尾根上も随分と雪が無くなり幼木や笹があちらこちらで顔を出し、あと一週間もすれば下部はブッシュを漕がなくてはいけないだろう。天気は良くないが三日前に来た時と違い時間の制約がないので、のんびり景色を眺めながら歩く。

二時間程でピークに到着し牛石探しに入る。点の記では浜益御殿の一等水準点は牛石より北に5.1mのところにあることになっている。水準点の位置はわかっているので牛石は水準点より

南に5.1mの場所を探せば良いのである。

水準点より南に約5.1mの場所には[タイトル画像の大きな石がある](#)。三角点なのだからいつも山頂で見ている四角いものを想像していたが、そんな物は探しても見つからない。

点の記の牛石からは大雑把すぎて正確な位置は解らない。ただ備考に東方斜柱切欠とあり、欄外に「斜柱ニ切欠ヲ附シタルトキハ 備考欄ニ記入スヘシ」とある。

足元にある大きな石は確かに東側の面だけが直線によく観察すると[削り落としたと思われる場所](#)もある。水準点の点の記では牛石(岩石)よりとの記述があるので、恐らく、これが牛石と呼ばれる三等三角点なのだろうとの結論に達した。

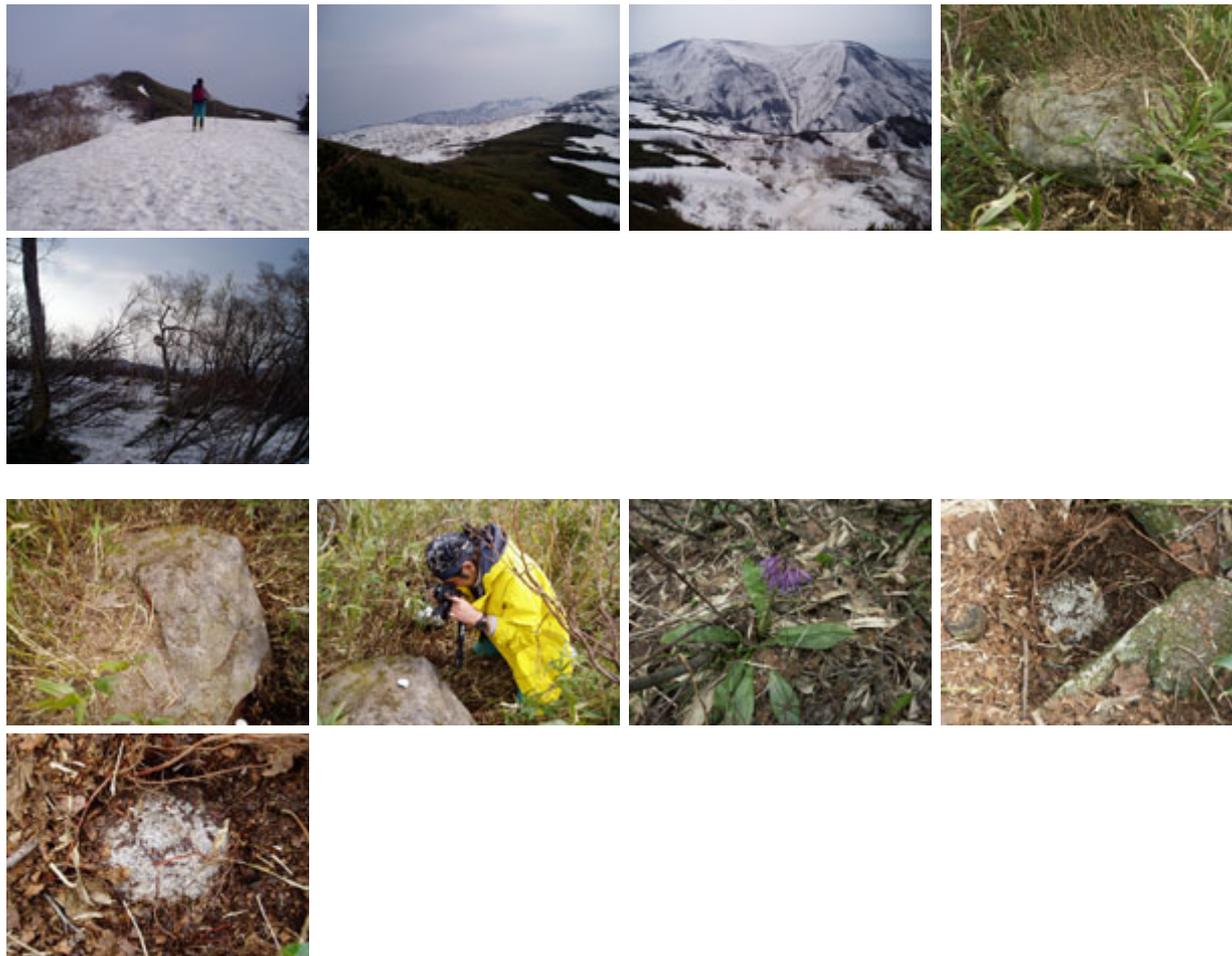
何か痕跡が残っていないか石の周りを少し掘っていると、白い陶器が出てきた。器の蓋のつまみみたいな形で今の時代の物では無いことがだけは解る。

*[陶器の画像1](#)、[陶器の画像2](#)

これ以外は何も見つけることは出来ないために、これが本当に牛石と呼ばれているものなのかは解らない。浜益御殿の水準点、牛石は有名にも関わらず、WEBでは画像も具体的な記述も見つからないために、どな

なたかご存知の方がいましたらご教示くださると助かります。

スナップショット(画像をクリックすると大きな画像を見ることができます)



[「三角点の探訪」](#)の上西様より情報を頂きました。

白い陶器は電話線の碍子の破片ではないかとの事です。

また、牛石については自然石を使った三角点は珍しいもので、無いわけではなく北海道では大雪山の緑岳にあるとの事です。

ただ、画像を見ただけではこれが牛石と呼ばれている三角点かどうかはわからないそうです。

この他に増毛山道の別荘側から登った最初のピーク(151m)には三角点でも水準点でもない別の標石があるとの事です。

じっくり取り組めば面白い発見があるのかもしれない。

2004年5月20日踏破

2005/06/01.....このページの訂正、加筆

大正時代初期に浜益御殿山頂付近に設置された三等三角点は点名が「牛石」で、浜益御殿に設置された水準点の点の記の略図を見るとこのページ

で取り上げている大きな岩石も「牛石」と明記されている。

昨年5月の調査では牛石＝この大きな岩石＝三等三角点と思い込んでいたのだが、それは私の間違いで浜益御殿頂上付近には「牛石」と名前のついた三等三角点と岩石が存在している。つまり、このページで取り上げている大きな岩石は「牛石」には間違いはないが、三等三角点の「牛石」ではない。

また、増毛山道上に施設された電話は武好橋の先から岩尾に下っていて、岩尾の分岐点から南には施設されていない。

それなら、この大きな岩石の「牛石」の周りを掘って見つけた碍子が何故、ここにあるのかは謎であるし、全国にある「牛石」には何らかの伝説などがあることから、浜益御殿にある「牛石」がそう呼ばれる事になった何らかの謂れがあるのかもしれない。

その様な事を考えると単純に増毛山道跡を歩くだけではなく、それに付随する事についても興味が尽きない。

今年(2005年)に入って、もう一つの三等三角点の「牛石」探しを三度行っているが、未だに見つかっていない事を訂正も含め加えておく。

[増毛山道行番外編/浜益御殿の牛石と水準点を探してPart1のページへ](#)

[databaseに戻る](#)